



撮影地/高崎市内のアトリエ
作品を前に笑顔を浮かべる村上さん

MURAKAMI SAKI

銅版画家

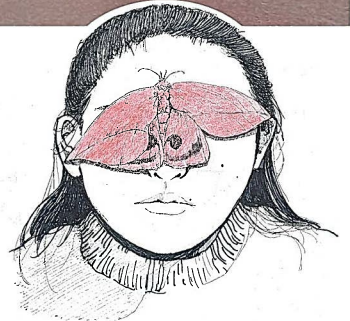


両親が動物病院を経営、病やけがの動物二種にいたことが心に刻まれ、多くの作品のコンセプトになっている。先天性の心臓疾患で4歳の時に手術。すでに完治したがトラウマで長らく、ニック症状に悩まされ、実家以外で夜を過ごすことが多かった。宿泊が伴う修学旅行は早退や欠席。大学も一巻のしかがでず、高崎市内の美家から電車から片道約1時間半、前6時出発、午後11時に帰宅する生活を7年間送った。絵を描く

苦悩

「版は人の心、自分が受けてしまふ傷、誰かを傷つけてしまふことを銅版に痛分けしてしまっている」
—薬研で銅を溶かして凹み(傷)をつける銅版技法「リフトグラウンド」で、1枚を起える大型作並を手掛ける新進気鋭の銅版画家、村上早さん(27)。繊密な描写ではなく、大胆な構図を大胆に描かれた作品は、見る人に強烈な印象を与える。「傷れは直感で描く」「子どもの線」「痛みを苦しんだ末にたどり着いた表現方法が多くの人たちを引きつける。

◇ オートメートの電動式大型プレス機を備える高崎市内のアトリエで、9月に都内で開かれる個展に向けて制作活動に励む。幼少期の心臓手術に伴う心的ストレスや、学生時代は周囲とのズレを感じながらも「どうにか合わせよう」と堪えて過ごしてきた。そんな息苦しい日々を救ってくれたのが、絵を描くことだった。



村上早さん自画像「苦しいときは絵をかいて、表現することは自分を救います」

銅版と「傷」分かち合う

「人に好かれるか好かれなかつたことが生きていくのではなかつたはずだ。(略)おまはは生きることを生きた」—山田かまちが残した力強い言葉に突き動かされる。自分を傷めることは認め、歪むことを素直に目の前の作品に向き合う。かまちのエネルギーあふれる作品には「一形のない情熱をどうにか形にしよう」とかまち。どうしようもない気持ちをぶつけている。「圧倒されるながらも共感する。「生きていく」と感じるものを表現したい。—今後はいまやインスピレーションへの挑戦も考える。内なる情熱はとどまることなく、無限の可能性を秘めている。

制作活動が活発になるにつれ、心臓手術による精神的な後遺症も改善に向かっている。2年前に意を改善して初めて友人と泊りがけの旅行に出かけた。「夜もすんばり過ごせた自分に感動した。—幼い頃に受けた「傷」が完全に消えることはなく、向き合うとする姿勢がにみ出た作品に人は心を奪われる。これからも銅版と「傷」を分かち合い、作品に魂を吹き込む。

「どこで心の安定を築き上げてきたが現在のスタイルを築き上げてきた。自分が何をしたいのかわからなかった。—」
油絵を目指して大学受験したが、期待せずしてほとんど経験のない版画専攻に、必死に技術を学んだが、絵柄が決まらず悩みが尽きることはなかった。大学3年頃か、自分が対しての怒りや悔みさながらあきらめる感情をスケッチブックにぶつけた。心の叫びを列んだノートは、今では20冊にも及び、制作に行き詰まった時の作品のモチーフにもなっている。

情熱

駆動となったのは大学3年。1、2年で学んだ4版種木版、銅版、石版、シルクスクリーンの中から、なんとなく専門に選んだ銅版画。銅を酸食させて作品をつくる技法、リフトグラウンドと出会い、才能が開花した。「腐食する生々しさが人間の肉体と似ている。—生きた銅版画」と向き合うことで人間に生まれてしまった後悔が少しずつ浄化されていった。

「銅版は人の心、自分が受けてしまふ傷、誰かを傷つけてしまふことを銅版に痛分けしてしまっている」
—薬研で銅を溶かして凹み(傷)をつける銅版技法「リフトグラウンド」で、1枚を起える大型作並を手掛ける新進気鋭の銅版画家、村上早さん(27)。繊密な描写ではなく、大胆な構図を大胆に描かれた作品は、見る人に強烈な印象を与える。「傷れは直感で描く」「子どもの線」「痛みを苦しんだ末にたどり着いた表現方法が多くの人たちを引きつける。

村上 早(むらかみ・さき)1992年高崎生まれ。高崎経済大附属高芸術コース、武蔵野美術大造形学部油絵学科版画専攻卒業。同大大学院造形研究科修士課程美術専攻版画コース修了。15年「第6回山本鼎版画大賞展」大賞、17年「群馬青年ビエンナーレ」優秀賞など受賞。19年に長野県の上田市立美術館で約150点の個展「gone girl 村上早展」を開催。